

主 文

原判決を破棄する。

被告人A 1を懲役八年に、被告人B 1を懲役六年にそれぞれ処する。

押収の檜丸太棒一本（証第一八号）はこれを没収する。

押収にかかる現金千七百十円（証第一七号）はこれをC 1の相続人に還付する。

原審及び当審の訴訟費用は被告人等の連帯負担とする。

理 由

被告人B 1の控訴趣意及び検察官の控訴趣意中同被告人に関する部分はいずれも事実の誤認を主張するものである。

まず刑事訴訟法第三九二条第二項により原判決中同被告人の殺人に関する部分を職権で調査するに、本件起訴状中の殺人の公訴事実の記載では「被告人両名は共謀の上C 1（当十九年）を殺害せんことを企て昭和二十八年一月十二日午後六時三十分頃和歌山県那賀郡a村大字b九頭龍神社附近道路上で被告人B 1に於て所携の棍棒を以て同所を通行中の右C 1の頭部を数回強打し更に被告人A 1に於て同女の頸部を手にて強圧〈要旨〉し因て同女を死亡せしめて殺害の目的を遂げ」た旨の訴因となつており、要するに訴因においては、被告人B 1の頭部殴打の所為と同A 1の頸部強圧の所為と相合してC 1殺害の結果を招来したものとし、刑法第六〇条適用の結果、被告人B 1はA 1の行為の結果について刑事責任を負うべきものとする趣旨と解されるのであるが、原判決第一においては、同女殺害をもつて被告人B 1の単独犯行と認定し、同女の頭部殴打のほか頸部強圧もまた同被告人の所為と判示しているのである。したがつて、前記のとおり頸部強圧の点については、同被告人に関するかぎり明示された訴因の範囲外の事実を認定したことになるのであるから、訴因追加等の手続をとることなくして頸部強圧の事実も認定した原審のこの措置は、刑事訴訟法第三七八条第三号後段にあたる違法があるものといわねばならない。そして原判決はその第二の窃盗罪との間に併合罪の関係があるものとして一括量刑処断しているのであるから、右違法は原判決中同被告人に関する部分全部の違法を招来するものというべく、同法第三九七条第一項により破棄を免れない。従つて前記各控訴趣意については判断をしない。

検察官の控訴趣意中被告人A 1に関する部分について。

原判決は同被告人が被告人B 1と共謀してC 1を殺害した旨の公訴事実に対しB 1の単独犯行と認定し、被告人A 1に関する部分については犯罪の証明不十分として無罪の言渡をしたのであるが、本件訴訟記録を精査し当審における証拠調の結果を参酌すると、右は事実の誤認であると思われるから刑事訴訟法第三九七条第一項第三八二条に従い原判決中同被告人に関する部分もまた破棄をまぬがれない。

そして以上両被告人に関してはいずれも自判ができるから、同法第四〇〇条但書に従いさらに次のとおり裁判をする。

第一、被告人A 1は肩書地で田八畝歩、密柑畑一町五反位を所有し年収五、六十万円をあげており妻A 2と二人で生活し、昭利二七年一〇月初頃以来被告人B 1を作男として雇い入れ家業を手伝わせていたところ、隣家に居住し株式会社D 1銀行D 2支店に通勤していたC 1（当時一九年）にかつてひどく恥をかかされたことがあり、一度同女に暴行を加えてやろうと考えていた。たまたま数日前から仲違いしていた妻A 2が昭和二八年一月一二日昼前から家出したあとで、B 1と二人だけで夕食をすました後、部落の下の方へ遊びに出ることを相談した際、もし途中でC 1にあえば同女を殴つてくれ五万円やるからといったのであるが、B 1としては、かねて路上で出会つて挨拶しても同女が応答もしないなど見下した態度を示していることを内心快く思つていなかった関係もあり、五万円という金も欲しかつたので同女を殴ることを承諾し、ここに両名打ち連れて同家を出た。ところが同日午後六時三〇分頃居村大字b九頭龍神社下の第一鳥居附近に差しかかつた際、ちょうど懷中電燈で道を照らしながら前記銀行から帰宅しようとして山道を登つてくるC 1と出会つたので、被告人両名は路傍に身を避けて同女をやり過したうえ、A 1の合図により、B 1において携えていた檜丸太棒（証第一八号）で同女の背後からその頸部を一回殴つたところ、同女が二、三間先まで逃げ石につまずいて倒れ、起き上ると共に「誰か判つた」といつたため、知られた以上は殺すほかはないと思つて右棒でさらにその頸部を二、三回強打したところ、同女は昏倒した。するとA 1が「うまいこといつたなあ」といいながらあらわれ、B 1に指図し両名でこれを附近の谷川まで運んだのであるが、同女が突然「お母さんお母さん」とうめきはじめたので、A 1においてもこうなれば殺してしまわねばならぬと決意し、B 1に見張をさ

せ、自身で同女の頸部を強圧し、もつて、同女をして脳挫傷頭部挫創よりの出血に基ずく乏血及び頸部圧迫のため間もなく同所で死亡させ、

第二、被告人B1は、右犯行直後前記殴打の際同女が路上にハンドバッグ等を取り落したことを思い出し、犯行発覚を妨ぐため、これらを附近の谷川に捨てるにあたり、右ハンドバッグ内から同女の所有であつた現金一、七〇〇円（証第一七号）在中の財布一個をぬきとつて窃取し、

たものである。

以上の事實は、

一、被告人A1の検察官に対する供述調書中「私は田八畝と密柑畑一町五、六反を持ち年収五、六十万円位あり、三〇才の頃現在の妻と結婚したが妻が身体が弱いため子供はない。妻は昭和二〇年和歌山のE1という医師から手術を受け子宮を半分とつたとかいつていた。私達夫婦仲は普遍であるが、ときどき同部落の未亡人F1のことから喧嘩をすることがある。」旨の記載

一、原審第四回供述調書中被告人B1の供述として「私は昭和二七年一〇月三日以来被告人A1方に作男として住込みで雇われ昭和二八年一月一二日同人と共にC1を殺したことは相違ない。私が家から持参した品は、紺サーズボン一着、同詰襟上衣一着、黒の作業用ズボン一着、浅黄の木綿ズボン一着、白のカッターシャツ一枚、白丸首長袖メリヤスシャツ一枚、黒のズック靴一足、白木綿申又一枚等であり、同家に来てから紺サーズのズボン、青丸首のセーター及び赤いジャンパーを私が買い、鼠色のメリヤスシャツ上下一揃、鼠色毛糸チヨツキ一枚と袖なしの細い縞の半てんを同家で貰った。同家は、A1の外同人の妻A2と二人きりで子供はなく、A1が親戚にあたる同部落の未亡人F1方へよく遊びに行くというのでA2が妬いたためと思うが、夫婦仲はよくなかった。C1の家はA1の家の下隣にあり、同女はc町の銀行へ通勤していたのでよくみかけて知っていたが、私が途中で挨拶しても挨拶を返したことがなく、偉そうに見下けている風であつたのでよい気持はもつていなかった。犯行当日たる昭和二八年一月一二日は朝A1方を出てd村へ行き、帰りにc町で近所のG1先生の奥さんに映画を見せて貰い、午後五時頃に帰った。そのときA2がいたかつたのでA1にたずねたら、午前一時頃出たきり婦らぬといつたので、前日もA2がA1と喧嘩して昼間出て行き夕方帰ってきたので、今日も喧嘩したのだらうと思つた。それから私は牛の飼葉をやつて、A1の準備した夕食を喰べ、二人でいろいろ火にあたりながらA2の話がでたがA1はA2は喧嘩ばかりしていてあんな者は仕方がたい、嫁に貰うんやつたらあんなもの仕方がないぞといつた。それで私はC1もいばり屋ぞといつたら、A1も彼奴に一ぺん恥かかされてあるんや、といつた。なおA1は昨年一二月末頃にもC1に一ぺんえらい恥かかされてあるんやといつたことがあるので、私は何でそんな恥かかされたんやときいたが、何てねえといつただけで黙っていた。それからどんな具合で話がでたのか憶えないが、私はその半月程前にbのH1川の堤防でcから選果場へ来ている女の子が二人の男に追われたという話をI1という者にきいたことがあるので、C1、cの銀行に行つていて毎晩あんなに遅うなるが気づかないやろかとA1に話した。話が前後するが、先程述べたように、A1は昨年一二月末頃にも恥をかかされたといつたとき彼奴一ぺんがんとやつてやんのやといつたことがあり、この一月一二日の晩も彼奴一ぺんがんと殴つてやろと思うというし、私もC1が自分を見下げてると話したので、そんなら一ぺんやつちやれといつたが、私はそれほどうらみもない人をよう殴らんといつた。するとA1は金あつたらやろわ（金をやればお前もやるだらうが）といつたが、私は黙っていたら、お前に五万円やるさけというので私は五万円くれりや殴るだけなら殴つてやろといつた。そしたらA1がそんなら今から久しぶりに下へ遊びに行きがてら道で出会つたらやつちやろうらというので、そのとき私はまだその日cへ行つてきた儘のよい服装であり、前日の雨でまだ道が濡れていたの、旧正月に実家へ帰るまでに汚しては困ると思つて、はいていたA1方へ来てから買った紺サーズボンと赤いジャンパーをぬいで黒の作業ズボンをはき、袖なしの半てんをき、地下足袋をはいて上り口の処に腰をかけて行こうかという、A1がA2が自分のものを皆隠してしまうて何もないのでお前のもの何かないかというので、私も何もないが前述のA1から貰ったメリヤスのシャツとバッチを洗濯しようと思つて雨縁においてあり、そのそばに私が家から来るとき持つて来た紺サーズのズボンも置いてあつたのをみて、あれ貸してくれというので、あれやつたら貸してやろという、A1は縁に上り、私は外へ小便しに出て家へ戻つて来たとき、A1は果して私のメリヤスのシャツとバッチを穿いたかどうか知らぬが、自分と揃いの柄の長袖の半てんを着て土間に立つていた。私が行こうか

というと、A 1は表入口を入った右側の物置の下から檜の木らしい棒を取り出して来たので、私はこんな太いので殴るかいなと思いつたが、よつしやといつてその棒をかついで、A 1も続いて出た。時刻は時計をみないからわからぬが午後六時半頃ではなかつたかと思う。三百米位おりましたところに索道があり、その辺は檜林があつて真暗な所であるが、A 1はこんな所で出おうたらいわし易い、出おうたら殴つてやれといつたが、私はウンといつただけであつた。それから更に下に進み九頭龍神社の第一の鳥居から約十間下手にある石橋の二、三間手前まで行つたとき、電池を振り振り足許を照らしたが上つて来るものがあり、五、六間の距離になつたとき、C 1であることがわかり、A 1は避けようといつてC 1が来たという合図の意味で私の詰襟の上衣の袖を引張つたから、私は道の左側の木の蔭に坐つてみると、C 1は気附かずに通り過ぎた。するとA 1は私の脊中をつついたが、私が黙つていると、やれという意味で更に強くつついたので、私は立ち上つてC 1を追つて行き、第一の鳥居の間程手前で追いついて、前の方に向つて歩いていくC 1の背後に迫り、檜の棒を両手に持つてあまり力を入れずに頭を一つ殴つた。私はその儘立つてみると、C 1は倒れすぐ起きて左の方の道を二、三間走りつまずいて倒れ、起き上りしなに誰か判つたといつたので、私が殴つたことが知られてはかなわんと思つたので、駆けつけて行つて二、三歩歩きかけているC 1の頭を二つ三つ力まかせに石棒で殴つたら、C 1は横向きに倒れて動かなくなつたので、死んだかと思つてみると、A 1が来て、うまいこといつたなあといつたが、私はえらいことをしたと思つた。A 1がこんな道の真中に置いたらあかんから下の谷へ連れていこうといつたので、私もそうやなと思ひ、棒は放つたかどうか知らぬが、C 1を抱き起し、第一の鳥居の二、三間上の方まで足の方を引摺るようにして行つたが、重かつたので手伝つてくれというと、A 1は着ていた半てんを脱いでその辺に置き足の方を持ち、第一の鳥居の所を通り過ぎ、二、三間上手のその西側にある谷の端の笹か雑草の生えている上に頭を北にして仰向きに寝かして完全に死んだかと思つてみると、C 1は何か訳のわからんことをい出しそのうちにお母ちゃんお母ちゃんといい、大きな声で何か助けを呼ぶようなことをいひそれがA 1に聞えると、同人はここは道端やしまだ死んでいないわ殺してしまおらといつて、C 1の頭の方から跨がるようにしてつくもつて、右手でC 1の首を押さえ、左手を道の上に突張つていたが、それでも何か声を出したので、A 1が谷へおろせといふので、まず私が一間程下の川辺に降り、C 1の足をつかんで引ずり下したときまた何か大きな声を出したので、A 1が少し上手から廻つて川辺まで降りて来て、私にお前見張りをしてよといふので私は第一の鳥居の辺まで行つて見張つていたが、くうくういうようなC 1の苦しそうな声がしたので、A 1がC 1の首を締めてるかなあと思ひ、また笹のざわざわする様な音や水のびちやびちやいう音がしたので、川で死体でも洗つてるのかなあと思ひ乍ら相当時間が経つたと思う頃に降りて来いといわれて行つてみると、C 1の体は川の中に入つていたものと思うが、A 1が一寸あげところといふので、二人でC 1の手を片方づつ持つて引上げると、ぐんなりしていたので完全に死んだと思つた。そのうち私はC 1がハンドバッグを持つていたことを思い出し、道に放つといたらあかんと思ひ、殴つたあたりで見付け靴の片方や万年筆らしいものを拾ひ、これをハンドバッグの中に入れて一しよに捨てようとあけてみたら、財布があつたのでそれだけ取つておいて、ハンドバッグと靴を東の方へ向つて放り、やれやれと思つた。そのときA 1が右第一の鳥居あたりでござそ動いている風だつたので、戻つて行くと、同人はそのときにはもう半てんを着ておりとうとう、うまいこといつたなあといつた。二人で何気なく最初C 1を待ち受けた石橋のあたりに来たときA 1から、F 1のうちにA 2が居るか知らんから見て来てくれといわれ、私は何も今頃行かんでもよからうと思つたが、またA 1としては明日からこのことで刑事もくるだろうから、何か考えがあるのやろうと思ひ、そこで待つていて貰う約束をして別れて下へおりて来た。岡方へ行つて自転車を出しF 1方の表まで行き様子を窺つたが、A 2が来ている様子もないので、引返し途中の池端でポケットに入れていた万年筆らしいものを捨て、J 1という雑貨店で自転車に跨つた儘、表から声をかけ出発前A 1から命ぜられていた電池二つを七〇円で買い、これを持つて来た空の懐中電燈に入れ、岡方へ自転車を預け、石橋のところに来たが、A 1の姿が見えぬので、第一の鳥居の辺まで行つたら、C 1の死体のある川原の辺りに何か白いものが動いているような気がしたので、谷の上の道から電燈で照してみたら、A 1がC 1の足許のあたりに両手を突っぱつてはつているような格好をしており、C 1のスカートが腹の辺までまくれあがつていたので、これはえらいことしてゐるなあ、強姦のようなことをしているらしい

と思つてあわてて電燈を消し、見張りの第一の島居の下手の石橋のところに降りて行き、財布の裏を思い出し、現金だけを取り出し、財布を谷川へ捨てたところ、手が出たので橋の下に行つて電池で照らしてみたら、また橋の上で見張つていると、大分下手の方から人が一人上つてくる人影をみたので、こらあかんと思つて電燈に手をあて覆うようにして戻りかけたところ、上からA1が下りて来たので、袖を引張ると感ずいたらしく、一しよに急いで帰りかけ百米ほど上つたら第二の島居の傍の電燈の光が照らしていたのでA1が私の服の袖を引張つて道をそれようといつたので、東北にあるJ2の家の方へそれ百米位行つてから振りかえると、通り過ぎていたので元の道に戻つて午後九時頃と思われる頃に帰つた。途中でA1が明日から大勢の刑事が来てかまかけるか判らんから引掛るなよというので、私はこんなことしてあんのに絶対白状せえへんよというのと、A1はわしは死んでも白状せえへんよといい、少ししてお前何か忘れもんしていないかというたので、別にないが棒を放つて来たというのと、そんなものかまへんが、わしは手袋放つて来たという、私がそうかいというのと、A1はまあ今日のことはわかれへんよといつていた。私は出かけるとき手袋をさそうと思つたが、ポケットに片方しかなかつたのでささなかつた。殴るときもさしていな。私は手拭は持つて行かなかつたが、A1は首に巻いていた。現場の位置、状況、附近の模様等は司法警察員作成の検証調書記載どおり相違なく、A1がC1の上になつていたときはスカートはまくれ上り腹が見えていたからズロースは下げてあつたと思う。鑑定書記載の死因頭部の傷は私が棒で殴つたからであり、頸部圧迫の跡はA1が首をしめたものであり、それによつてC1は死んだものと思う。一月一九日頃A1が納屋の横手の焚火にあたりながら、軍手を二、三足出して、前に現場にあつた手拭とうちにあつたのと似ていて困つたから今度現場から手袋があがつたということであるし、それと同じ種類の手袋を置いていて嫌疑がやかましいとかなわんからといつてそこで燃やし刑事に見られて疑われるかも知れんからといつて、灰を瓦にのせてそこから少し上手の谷へ捨てに行つた。証第一七号（現金一七一〇円）は私が盗んでA1方の便所にかくしておいたものである。証第一八号（樗丸太）はA1が物置の下から出して持たせたものでそれでC1を殴つたものに相違ない。証第二〇号（血痕の附着した西洋手拭）と同じ手拭がA1方にありA1はこんな手拭を首に巻いていつたと思う。証第二二号（血痕の附着した軍手一足）は私の持つていつたものではないが、同じような軍手で黒い筋の入つたものを私も貰つて打つており犯行当時片方だけ持つていた。証第二四号（軍手片足）がH2池から出てきたということであるが、私所持の軍手片足が翌朝見当らなかつたから、H2池に万年筆のようなものを捨てるとき、それについて落したものかも知れない。証第二六号乃至第二八号（紺ズボン一着、メリヤス襦袢一枚メリヤスズボン一枚）はいずれも私のもので、A1方雨縁に置いてあつたものを同人が犯行当時着ていつたものであるが、犯行一両日後同人の命により牛小屋の藁の中に隠した。証第三〇号第三一号（半てん二枚）の袖のない方は私のもので犯行時着用していたものであり、袖のある方はA1のもので犯行当時着ていたが、C1の死体を触つたときは脱いでいた。A1方からA2の知らない女物のズロースが沢出押収されたということであるが、それは一月一三日頃A1がエロ本を刑事に見付かると具合が悪いといつてかまどで焼いたことがあり、そのときズロースを出してきて二人であちこちに分けて仕舞い、そのうちの一部をA1が懷に入れてどこかへ持つて行つた。私は昨年一二月頃A1に頼まれてH3坂の上の家と中筋のJ3といううちで干してあるズロース一枚宛を盗んで渡したことがあり、A1は喜んで受取つていた。H3坂のときは五百円、J3のときは四百五十円貰つた。去年の十月頃A1から五百円やるからC1の裏に干してあるズロースをとつて来いといわれ盗ろうと思つて竿をおろしかけたとき、端が外れがチャンと音がしたためC1がてて来て、あんた何してるの。この前もあんたがとつたのやろといわれたので、前はお爺さん（被告人A1）で今日も頼まれて来たんやといつて走つて帰つた。大して叱られもしなかつたが、その後C1と顔を合せるのが恥しかつた。そのことがあつた前に貰い風呂の帰りにA1がC1の物干竿からとつて丸めて持つて行つたのを見掛けたことがあるのでそういつたのである。H3坂でズロースを盗つたより前のある朝、便所でA1がズロースを被つてつくもつていたことがあり、そんなことするためズロースを私に盗ませたと思う。私は今まで女遊びをしたことも女と関係したこともなくC1を好きに思つたこともない。A1は金銭には細かいがおとなしく私を可愛がつてくれズロースの件以外に別に変つたことはなかつたし、A2もよい人であつた。私は五万円欲しさに棒で殴つて怪我させることと思ひ引受けたが、圭ちゃんが「誰か判つた」というたので、それではかなわんと思ひ二度目に強く殴

つたのであるがそのときは殺す気であつた。A 1が首をしめたあたりには明りはないが、九頭龍神社拝殿の前にある第二の鳥居附近に街燈があり、そのあかりがごく薄ぼんやり届いていた。」

旨の記載

一、 被告人B 1の検案官に対する第一回供述調書中

「A 1がC 1に何で恥をかかされたか問うても、それはなあといつて語を濁してたが私は平素A 1が女好きだから、きつとC 1に悪さでもしてはねつけられたのではないかと思つた。私が殴つたためC 1が倒れたとき、A 1が谷の端へ持つて行けといい、私が肩をA 1が足をさげC 1を鳥居の西側の谷の端まで運び一度そこへおいたが、C 1は手足を動かしながら「お母ちゃんお母ちゃん」と小さい声で呼んでいた。A 1はそれをきき谷にひきずり落せというので、私が足を持つて身体を水の中にいれたが、まだC 1はお母ちゃんお母ちゃんとか兄さんがくるとか身をもだえていた。するとA 1は谷へおりて来て顔をみられておるので生かしておいてはならぬので殺してしまうからお前は見張をしろというので、私は上へあがつて笹の中にしやがんで誰か来はせぬかと見張していると、A 1が来いというので降りて行くと、もう何もいわないし動かぬようになつていた。A 1が引き上げてというので、二人でC 1の手を一方宛持つて川から引き上げた。」旨の記載

一、 原審第五回公判調書中被告人B 1の供述として「C 1をA 1と二人で殺したことは相違ない。途中で一人で殺したといつたことがあるが、警察の留置場でA 1から一人でやつたというてくれといわれてもおり、私は一人でも二人でも別にどううちゆうことないわと思つて云つた。逮捕される二、三日前にA 1が絶対に判るまいと思うがもし捕えられてもお前一人でやつたといえ、お前の留守中家族の面倒はみてやるし、出て来てからの仕事のことも心配するな、まあ二、三年も行つてくればええわよといつたが、私は万更判つたらどむならんと思つていた。その後A 1が逮捕されて留置場で毛布を被つて震えていて可愛そうに思つて、一人でやつたといつて罪を被つてやつてもええわよと思つたのである。衣類の点については警察ではあまりやかましく問われず、検事から紺の詰襟の上衣に血がついていなかったのでもう衣類がどこかに隠してあるだろうといわれたので牛小屋にあるといつたのである。C 1を運ぶときに特に血のつかぬように注意していた。」犯行前下へ遊びに行くことについてはハツキリは言わなかつたが、J 4方かJ 1方で饅頭かパンの一つでもおごつてくれるかなあと思つた。そこへ遊びに出るについては、その日は雨上りで道が泥だらけであつたし、A 1の着ていた国防色のズボンはとか和歌山方面へ行くとき着て行つたものだから若し辻り転んでも差支ないように私の汚やた衣類を貸してくれといつたものと思う。私が牛小屋にシャツやズボンを隠してから、A 1があれさえ隠したらわからんといつたので考えてみて、もしわかつても私のものばかりやしA 1はそんなもの着やせんといえはすむし、なかなかうまいこと考えてあるなあと思つた。また犯行後引返して来るときあのまままっすぐ登つてれば新田やし、J 2の方へそれれば誰かに見られていたとしてもこつちの人やと思うだろうしうまく考えてるなあと思つた。またA 1との共同犯行だといひながら、衣類の点をいわなかつたのは、A 1のものが入つておればすぐいのであるが、自分のものばかりしだから、どうせ自分一人でやつたと皆が思うだろう思つていひなかつた。」旨の記載

一、 J 1の検案官に対する供述調書中「昭和二八年一月一二日の晩、A 1方の雇人で時々菓子やうどんを食べにくるB 1が、下の方から自転車で上つて来て自転車に跨つた儘、電池を下さいといつて百円札を出したので売つて三〇円の釣銭を渡した。その間同人は電池を箱の中に入れていた。それは午後七時から七時半までのことでなかつたかと思う。私方はH 3坂から一町位下手にあり宮に上る道に面した間口三間位の家であり、間口には硝子障子をはめてある。」

一、 原審におけるK 1の証人尋問調書中「自分は九頭龍神社宮司であるが、同社境内の電燈としては拝殿正面に四〇燭光一つと、第二の鳥居東手に四〇燭光の街燈一つと、拝殿の東手の祇園社正面に二燭光一つの三つあるだけであり毎日点燈している。右電燈の光は冬の落葉時には下手の第一鳥居附近まで薄ぼんやり届くから、その辺に人がいればあたりが真暗でもその人影がぼおつと判る。」旨の供述記載

一、 原審における証人K 2の尋問調書中「自分は昭和二八年一月一二日午後八時二五分か三〇分頃勤務先からの帰途九頭龍神社第一の鳥居のあたりを通過した。同鳥居のすぐ下の石橋を渡りかけたとき、その前方約一〇間位離れたところから自分の方に電燈を照らされたので上から降りて来た人かしらと思つたところ、下の方を向けていた電燈を上の方に向けて一間位前を照らしながら上つて行つたので、自

分と同じeの方へ帰る人だつたら自分も電池をもつていないのでその人一しょに帰ろうと思い、追いつこうとしたが先方も歩が早くだんだん引き離され右鳥居から少し行つたところにあるカーブに差しかかつたときには、前方の人はJ2さんの家のある方へ曲つてしまつた。その人は電燈をつけ放しで歩いており、燈をもつた人は一人であつた。その他に連れがあつたかどうかわからない。」旨の供述記載

一、 当審第四回公判期日における証人K3の供述中「自分は昭和二八年五月までc地区警察署の警部補として勤務し、本件捜査主任官を命ぜられ総員三四名で捜査に従事した。事件の発生した翌朝の同年一月一日午前七時半頃に犯行現場に赴き検証した。附近一帯を調査した結果、犯人の遺留品と思われる櫛の棒とタオルを発見しこれから犯人をさがした。

そのタオルは被害者方では絶対に持つていながつたといい、同じようなタオルを持つていた隣家のA1のことが捜査員から報告がありこのタオルは和歌山市のL1店から買い受けたことがわかり、L1からたぐつて製造元の大阪府泉南郡のL2工場を捜査し、同時に那賀郡一帯の行商人販売店を捜査したが、他にこのタオルを販売したものを発見できたかつた。他面犯行の場所状況等から本件は土地に深い関係があり、被害者につながるのあるものではないかとの想定のもとに容疑者二〇名について取り調べた結果、アリバイ等から容疑がうすくなり、最後に被告人兩名がでてきた。B1は事件発生直後の深夜d村に行つて張込員に誰何されたところから怪しいと出たのである。そのうちA1方にさきの兇器たる櫛の棒と切口の全く一致する櫛の切れ端を発見し兩名を検挙するに至つた。自分等としては死体を引ずつた形跡のないこととか現場の後片づけがなされていることから単独犯行ではたいと判断したのである。右タオルを調査してみると、A1方では遺留のタオルとよく似たものを一打買つた。うち四本は新しいまま残つており、あと八本の使途譲渡先について、三本はM1にやつた後は誰かにやつたとか使つたとかでハツキリしない疑点があつた。この点と兇器の切れ端がでてきたということで逮捕状を請求した。被害者が大した金を持つていないことは土地の者なら知つてゐる故、怨恨はどうかと思ひこの点につき痴漢の捜査をした。というのは被告者の死体の状況をみても、両足を大きく開き、ズロースは一たん下げて局部を出したのではないかと思われる点がある。それにスカートがまくり上げられている点から、附近の変態性慾者や性的異常者の捜査も併せてした。するとA1は年はいつてゐるがその点ではおう盛だという報告があり、c町の特飲街にも出入しているという聞き込みがあり、疑をもつたところ、同人はエロ本を持ちたん読しているという聞き込みがあり、その後それを焼いてしまつたことが判明した。A1、B1の兩名は頑強に否認するので、犯人が高飛することも考へて粉河駅外三ヶ所に張込を行い二面捜査をしたところ、逮捕の翌日たる一月二二日B1が自供した。同人の自供に基ずき万年筆型懐中電燈を捨てた場所をしらべたところ自白に符合する場所からこれを発見したので、同人の自供に確信を持つに至つた。B1は最初共犯だと自供し、ついで一月二八日か二九日の晩和歌山地方検察庁に送るという前日か前々日の晩に単独犯行を自供した。しかしその中に二、三の疑点等があつた。それはB1が「被害者を谷川へ引きずり込んだそのときお母ちゃんお母ちゃんと泣いたので首を締め動かなくなつたので死んだと思つて被害者の所持品を片づけた。それからまたおりてきてみたら被害者が生きかえり、川の中から少し高い段の上にはい上つていた。それでも一度しめた。」と自供したが、頭骸骨粉碎の被害者が一、二尺高い所まではい上る気力があるかどうか疑問であり、それと自供では一人で引きずり込んだとなつてゐるが、引きずれば靴下が破れるとか脱げるかする筈であるとの点に疑問があつた。それでN1医大のN2先生の意見を聞いてみた結果、B1の単独犯行の自供は嘘ではないかとの疑問をもつに至つた。共犯の自供にしても細部には多少の矛盾はあつても供述を重ねるに従つてだんだん本当のことをいうと信じ、特に追及せずB1のいうままに調書をとつた。盗んだ現金の額、隠し場所、衣類を牛小屋の敷藁の下にかくしていたことに関する点等はその例であり、本人の言いなりになり調書をとつていたので発見がおくれたことになつたのである。」旨の供述部分

一、 K4の検察官に対する供述調署中「自分は昭和二八年一月一二日午後五時四〇分岩出発のバスに乗り一五分か二〇一分でcへつくのでそこで降り近くに預けてある自転車を受取りそれに乗りbを曲つたところでC1が歩いて帰るのに追いつき同女の連れになつてやるやうな気持でゆつくり自転車を踏んでH3坂の下まできて、二間位後を歩いてついてきた同女と別れた。バスが六時前についたとして同女に追付いたのが六時六、七分位になる筈であり、H3坂下まで十五分位はかかるから、同女とH3坂の橋のところで別れたのは六時二十分位ではないかと思う。」旨

の記載

一、 J 4 の検察官に対する供述調書中「自分は昭和二八年一月一二日午後七時過妻と共に九頭龍神社一の鳥居のそばの道を通つたとき路上に血が落ちていたが犬の血だろう位に思つて通り過ぎた。翌朝午前一時半頃、C 1 が帰らないうのでさがすことになり、血のあつた附近をさがしたところ、死体となつて発見された。C 1 は股をはちかつて仰向けになつて倒れており、ボックスもその下のシャツもまくれあがつていた」旨の記載

一、 原審におけるK 5 に対する証人尋問調書中「私は昭和二八年一月一二日の夜C 1 が居ないというので十人位と一しょにさがした結果最初に同女の死体を発見したが、私はもちろん他の者にも警察の人がくるまで触るなど注意して警察に知らせた。発見当時の死体の位置、格好、ズロース襦袢スカートの状態等は同月一三日附司法警察員の作成した検証調書中の該当部分のとおりである。」旨の供述記載

一、 原審第四回公判調書中証人G 2 の供述として「私の夫G 1 は教員であり昭和二二〇年七月bに疎開してきて以来被告人A 1 は色々面倒をみてくれていた。昭和二八年一月一二日午後五時頃同人型に寄つたことがある。そのとき妻A 2 はいなかつたのであるが、A 1 はA 2 はちよいちよい出ていつてどむなるといつていた。その前日A 2 二人で名手にいつたことがあるが、その途中A 2 は夫にF 2 (F 1 の実家) へ寄つてF 1 との関係をいつて来てやつたといつて脅かしたら夫はびつくりしてF 2 へ手紙を出す様子だつたと面白がつていた。そのことを十二日の夕方A 1 方へ寄つたとき同人に話したら同人はA 2 はそんなことを自分で考えていうような頭をもつていない。二、三日前からC 1 方へよく行つたからC 1 の校長先生(被害者の父C 2)に智恵づけられていつたことやろといつて怒つていた。A 1 はF 2 に自分とF 1 とは別に變な関係はないという意味の手紙を出したといつていた。」旨の記載

一、 F 3 の司法警察員に対する供述調書中「自分の娘はbのF 4 に嫁いだが十一年位前に夫と死別し二児と後家で暮しているが、昭和二八年一月一日今まで文通したこともないA 1 から速達がきた、その内容ははつきり記憶はないが、何でも娘F 1 に関することであり、またA 1 の妻も来たようにかいてあつたがそんなこともなく、要するに何のこともわからずその儘にしておいた。」旨の記載

一、 A 2 検察官に対する第二回供述調書中「私はA 1 の妻であるが、私方から持帰られたズロースのうち私の全然知らないものが四枚あり、夫の部屋から出たということであるがどうして夫がそんなものを持つていたかわからない。」旨の記載

一、 I 1 の検察官に対する供述調書中「自分はA 1 方から三〇間上に住んでいて互に貰い風呂したこともある。同人は夫婦雑誌とかその他エロ本のようなものをよく買つて読んでおり、貸して呉れたので自分も読んだことがある。相当露骨な記事や裸体写真が出ていたので、おじいさんは若いなあえらいもんだ、と感心したようなこともあつた。自分方に風呂貰いに来たとき、A 1 は家の奴は子宮の手術をしたため役に立たん冷たいと不足をいつていたことがあり、結局子供がないから夫婦仲がうまく行かんのだろうと思つた。」旨の記載

一、 K 6 の司法警察員に対する供述調書中「私はO 1 という芸名でc町の特殊飲食店O 2 で芸妓見習として働いており、和歌山県の美人投票で推せんされたことがあるが、その投票名かである昭和二七年五月二〇日頃、被告人A 1 が投票をもつて来てくれて呼んでくれたことがある。同人は一現の客であるのに、私の着物をはぎとり、無理に長襦袢やおこしまでとつてしまい、私の陰部を指でいらつた揚句舌でなめたりした。私も商売はしているがこんなしつこい人はあつたことはないののでつい喧嘩をしてしまつた。その後ちよいちよい来られるが居留守をつかつて歸つて貰つてゐる。そんなときでも怒りもせず、にやにや笑つて歸つてゐるとのことである。」旨の記載

一、 原審第六回公判調書中証人K 7 の供述として「自分はc町で特殊飲食店O 2 を経営しているが、A 1 は終戦後から毎月二、三回は遊びに来ており、O 3 新聞社主催の美人投票のあつた頃も同様であつた。」旨の記載

一、 M 1 の検察官に対する供述調書中「私は昭和二二年一〇月頃から昭和二七年盆までA 1 方の作男をしていた。同人方で昭和二七年三月頃と盆に帰るときとに白地に赤の線のはいつた手拭三本を貰つたことがある。かためて買つたらしくA 1 方でもその手拭をつかつていた。A 1 は酒は強い方ではなく、道楽といえば見たわけではたいが女ではなかつたかと思う。

エロ本の夫婦生活、千一夜、リベラルというような雑誌を買つてちよいちよい読んでいたからそのように思う。私は月に一、二回はcへパンパンを買いにでていた

が、A 1 も遊びに行っていたように思う。A 1 は女の方は変っており私も二、三度
同人が懐中電燈を照らし乍ら妻のA 2 の陰部をなめていたのをみたことがある。」
旨の記載

一、 K 8 の検察官に対する供述調書中「自分方はA 1 方の近くでA 1 家の人
はよく風呂に来ていた。昭和二七年五月頃牛の草をあげたところ奥さんのA 2 さんか
ら西洋手拭を一枚呉れたがその後使つてしまつてどんな手拭であつたか覚えていな
い。A 2 さんが二枚といっているそうであるが一枚であることは相違ない。」旨の
記載

一、 A 2 の司法警察員に対する第一回供述調書中「私はA 1 の妻であるが、被
告人B 1 は昭和二七年一〇月作男として雇入れた。平素は無口で何を言いつけても
よく間に合い、近所の小さい子供等を可愛がり、B 1 B 1 とよくなつていた。
近所の人達といさかいをしたこともない。本件現場にあつたタオルは印やその他が
合っているだけで何とも思わない。あのタオルは一昨年の秋か昨年始め頃かに和歌
山市L 1 間屋で十二本を一本三十七円位で買つたと思つている。そのタオルにつ
いてはM 1 に三本、K 8 に二本、四本は新品の儘残つており一本は枕覆として他の二
本は自宅で使用し丁度十二本になるわけであるが正確な記憶はない。」旨の記載

一、 原審第七回公判調書中証人C 2 の供述として「私はC 1 の父であり一月一
二日の晩はC 1 の帰りが遅いので迎えに出るまでラジオを聞いていた。A 1 が同じ
放送を聞いていたと法廷で供述したのを傍聴していたが、その内容については同人
は、秩父宮の枢が「トヨシマオカ」（豊島岡）へ行つたというのを聞いたが、その
ときアナウンサーはたしか「トシマガオカ」（豊島ヶ岡）といったと思う。またア
ナウンサーは「クモツ」（供物）といった筈であるのにA 1 は「キヨウモツ」（供
物）と述べていたが、以上二点は変に思つた」旨の記載

一、 原審第一〇回公判調書中証人M 1 の供述として「C 1 が殺された事件につ
いて昭和二八年一月一九日部落民十四、五人が相談した結果翌二〇日犯人が早く出
るよう祈願するため木の本八幡に参詣したことがあるが、そのとき私もA 1 も参
加した。粉河発午前八時一四分の汽車にのるため歩いていいたとき、c の踏切の手前
の所で、大阪へ行つた帰りに寄つたということにして呉れ、そしたらお前にP 1
（A 1 所有の密柑山の名称）をまかすからといわれていた。大阪からの帰りという
のはC 1 が殺された晩のことであり、まかすというのはやるという意味にとつてい
た。それでこれまであやふやな証言をしたのであるが、実際には同夜はA 1 方には
寄つてはいない。P 1 山というのは面積が二反半位あり、時価四、五〇万円位と思
う。」旨の記載

一、 原審第三回公判調書中証人K 9 の供述として「自分は昭和二八年一月二四
日頃c 地区警察署の留置場第二房に窃盗容疑で收容されていたが、同房に被告人B
1 がおり、隣の第一房に被告人A 1 とK 1 0 が收容されていたが、その仕切板に
直径三糎位穴があり、そこからA 1 が私に「B 1 よお前一人でやつたといつてく
れ、そしたらわしが出られるから、よい弁護士を入れてやるから。」といったの
で、B 1 にその旨伝えてやつたことがある。そのときはA 1 が相手が自分とは知ら
ないでB 1 であると思つて話したではないかと思う。」旨の記載

一、 原審第四回公判調書中証人K 1 0 の供述として「自分は昭和二八年一月二
〇日窃盗の現行犯として逮捕され、同月二四日頃はc 地区警察署留置場第一房に留
置されていたが、同房には被告人A 1 がおり隣の第二房にはK 9 と被告人B 1 が留
置されていた。一月二四日午後七時から八時までの間に間の板壁にある穴から私と
田代と雑談をし、ついでA 1 が代り「お前一人でやつたといえ、そしたらわしがで
たらよい弁護士を雇つて罪を軽くしてやる」と二回言い、最初は田代がきき二度目
はB 1 がきいたようである。」旨の記載

一、 鑑定定人N 2 作成の鑑定書（死体）

一、 司法警察員作成にかかる昭和二八年一月一三日附同年二月二七日附各検証
調書

一、 検察官作成にかかる昭和二八年一月三〇日附同年二月六日附各検証調書

一、 原審及び当審における検証調書

一、 押収にかかる現金一七一〇円（証第一七号）樫丸太棒（同一八号）血痕の
附着する西洋手拭一本（同二〇号）西洋手拭四本（同二一号）血痕の附着する軍手
（同二二号）A 1 よりF 3 宛封書一通（同二五号）紺色ズボン一着（同二六号）メ
リヤス襦袢一枚（同二七号）メリヤス袴下一枚（同二八号）はんてん二枚（同三
〇、三一号）紺色詰襟上衣一着（同三三号）

を総合してこれを認める。

法律に照らすと被告人両名の判示殺人の所為は刑法第一九九条第六〇条に、被告人B 1の判示窃盗の所為に同法第二三五条に各該当するが、前者については所定刑中有期懲役刑を選択し、被告人B 1の右両罪は同法第四五条前段所定の併合罪であるから同法第四十七条第一〇条第一四条に従い法定の加重をし、

以上刑期範囲内で被告人A 1を懲役八年に被告人B 1を同六年に各処し、没収について同法第一九条第一項第二号第二項押収物件還付について刑事訴訟法第三四七条、訴訟費用の負担について同法第一八一条第一項本文第一八二条をそれぞれ適用して主文のとおり判決をする。

(裁判長判事 荻野益三郎 判事 梶田幸治 判事 井関照夫)